

## 島台考―序説

はじまり ―目を引く不思議な形

島台というものがあつた。

これを知つたのは偶然である。井原西鶴の「武家義理物語」を読んでいたときだった。挿絵のなかに不思議なものを見付けたのである。それは足が付いた奇妙な形の台で、台上には松の木の盆栽のように見えるものが載っており、その他に何かの飾り物も置かれている。

「武家義理物語」は義理に生きた武家の話をまとめたもので、「義理」とは何かを具体例によつて語る物語集になつている。義理という観念を物語に仕立てて伝えようとの意図がまず第一にあるせいから、挿絵は少ない。大本六卷六冊全二七章からなるこの物語全体で、挿絵は二〇数点しかない。刊行されたのが貞享五年（一六八八）であ

るから、まだ木版刷の書物がふんだんに挿絵を配するようになる前である。当時の諸本に比べれば比較的多いともいえるが、その後の出版物からみれば挿絵が少ないのは印刷技術史上の制約ももちろんあるだろう。<sup>1)</sup>

白幡洋三郎



図 1

わずかな挿絵は、しかし当時の読者に強い印象を与えたのではないかと想像できるが、私にとつても挿絵はこの物語を読み進める上でなかなか興味深いものだった。その挿絵の中でもとくに私の目を引いたのが奇妙な台の描かれている図だった。(図一)

松飾りのある台が目立つように中心に描かれ、礼服を着け威儀を正した人物がその周囲をとりかこむように座っている。松飾りの台はこの場面で大きな意味をもっていることはあきらかである。この台の意味を知らない私は、これが何か大事な役割を担うものらしいと見当をつけた。けれども、人々の座の占め方からみて進物であろうか、それとも場の装飾品であろうかと想像をめぐらすほかなかった。

この挿絵は、主人公である明智十兵衛(明智光秀)のもとに、わけある娘が嫁いでくるくだりに添えられている。婚礼の儀式の場面と考えてよい。本文は「十兵衛も縁の始めを祝ひ、松竹の台の物を調へ、数々の杯事(さかづきごと)までも……」となつていて、たしかに婚礼の場面であることがわかる。読み下し解説文(新編 日本文学全集『井原西鶴集』四、小学館、二〇〇〇年)では、「十兵衛も縁組を祝い、松竹を飾った島台を用意し、三々九度の杯を酌み交わしたが……」となつており、解説者はこの挿絵に描かれた台状の物を「島台」と書いていた。私が「島台」の名を知ったのはじめである。

本文にある「松竹の台の物」に、この小学館版『井原西鶴集』では注がつけられていて、そこでは「州浜台の上に、松竹梅や鶴亀や尉(へいじょう)姥(うば)を飾ったもの。婚礼や饗応などの飾り物。島台」と解説が書かれていた。どうやらこのような形をした(飾り)物は、島台と呼ばれていたらしい。現代語訳にも注にも決め言葉として「島台」という表現が使われている。島台は専門家なら知っているもの、あるいは現代に生きているものではないか。ひよつとして多くの人が知っていて、知らない私の方が珍しいのかもしれない。この興味と不安の両方からせき立てられるようにして、私の島台探索がはじまった。とにかく島台とは何か、自分なりに調べてみようと思ひ立ったのである。

#### 一 島台とはそもそも何ものか

つとより早く「島台とは何か」の概略を知るために、まず百科事典をひもといてみた。ところが「島台」の見出しはみつからなかつた。あれこれ捜しているうちに「州浜」の項で島台という言葉を見つけた。

「すはま(州浜) 祝儀の飾物、および和菓子の名。飾物の州浜は州浜台の略で島台とも呼ぶ」(平凡社『世界大百科事典』)。

ようやく一ヶ所だけ「島台」の表記を見つけたのだが、この記述

によれば、島台というより州浜と呼ぶのが一般的であるらしい。しかも州浜は「和菓子の名」でもあるという。そういえば「すはま」と呼ぶ和菓子があつたことが記憶の中から浮かび上がってきた。菓子の「すはま」については考察を別に行うとして、「祝儀の飾物」である「州浜」別名「島台」についてさらに追求してみることとした。先の引用は次のようにつづいている。「出入りのある浜辺をかたどつた台で、これに松竹梅、鶴亀、尉（じょう）と姥（うば）などの作り物を配して、婚礼、正月その他祝儀の席に飾つた。進献する品物を載せることもあつた。その形はつとに図案化されて紋所になり、また衣服や調度の文様としても用いられた」（同前）。

おおむね「武家義理物語」の解説と似た内容であるが、婚礼（や饗応）に際して用いられることに加え、あらたに「正月その他の祝儀の席」に飾られることが加わっている。どうやら婚礼の席だけでなく、一般に饗応の席でも、正月の祝いの席でも用いられるらしい。とにかく祝儀の席の飾り物であるらしい。さらに紋所や文様としても用いられると記されており、その形を図案化して象徴的な用途に向けられるという。

「州浜」はしかし、庭園にも用いられる表現である。たんに図案だけではなく、庭園では海辺や池辺を象徴する小石敷きの水辺を一般に「州浜」と呼び、庭園造形の専門語として確立している。だが、庭園造形の専門語としての州浜は、この百科事典からは欠落してい

る。

菓子の州浜、庭園造形の州浜は知っていたが、飾り物としての州浜、そしてその州浜が私の探し求めている島台と同義であるらしいことは、これによつてはじめて知ることができた。まだぼんやりとはあるが、島台なるものの輪郭が見えてきた。

事典に尋ねるほか、やはり歴史的事は辞書を見ておく必要がある。そこでいくつかの一般的な辞書を調べてみた。島台はたしかにとりあげられていた。

①洲浜（すはま）台の上に、松・竹・梅に尉（じょう）や姥（うば）や鶴・亀などの形を配したもの。蓬萊山を模したものという。婚礼・饗応などに飾り物として用いる。古くは島形（しまがた）といい、肴などの食物を盛つた。しま『広辞苑』第四版）。

婚礼や饗応などのときに飾られるものであることが説明され、先の「武家義理物語」の解説と同様に「洲浜台」の上に飾り付けしたものだとしてある。島台の説明に州浜台が持ち出され、また古くは「島形」といい、「しま」とも呼んだらしい。島台の形、飾りの様式などがまた不明確さを加えたようでもある。島台とは何かを求めて尋ねると、島台とは「洲浜台の上に松・竹・梅……などの形を配したもの」と答えられ、その洲浜なるものがまたわからないのである。

『広辞苑』（第四版）で「洲浜台」をひくと「洲浜」を参照せよと

指示されている。そこで「洲浜」をひくと「①洲が大きくなり、海岸線に曲線的な出入りのある浜辺。②洲浜の形にかたどった台。③洲浜形の略。④棹物菓子の名。⑤紋所の名。と五つの用例が示されている。そして洲浜の用例②には、図(図2)が付されている。この図によつて「洲浜Ⅱ洲浜台」なるものがどんなものかわかる。

ただしこの図をよく見ると、松・竹らしきもの、草花のようなものが台上に立てられ、鶴と亀が配されている。とするとこれは島台の図でもある。なぜなら「島台」の項の説明文①が「洲浜台の上に、松・竹・梅に尉や姥や鶴・亀などの形を配したもの」となっているからである。では「洲浜Ⅱ洲浜台Ⅱ島台」となるのだろうか。島台についての説明文を正確に読むと、「洲浜台の上に」各種の形を配したものとなっているか

らだ。台そのものは洲浜台と呼び、飾り物が台上に載せられている全体を島台と呼ぶのが正確である。ところが②の解説は全文が次のようになっている。

「これに岩木・花鳥・瑞祥のものなど、種々の



図2

景物を設けたもの。もと、饗宴の飾り物としたが、のち正月の蓬萊・婚姻儀式の島台として肴を盛るのに用いた。洲浜台。」(同前)

したがつてこの文章を厳密に理解すると、洲浜の形をした「台」もその上に景物を設けた「飾り物」も同じく洲浜であり、洲浜台であることになる。さらに『広辞苑』(第四版)には「島形」の項が立てられていて「山水の景を模した盆景」と説明があり、島台を参照せよとの指示がある。広く意味をとれば「島台Ⅱ洲浜Ⅱ洲浜台Ⅱ島形」となると考えてもよいことになる。厳密に読みとるなら、洲浜台は上に飾りがない状態を指し、島台・島形は飾りがあるもので(島台・島形Ⅱ洲浜台十飾り)、洲浜はどちらをも含む意味になるとの推測もなりたつ。

『日本国語大辞典』では

「島台 婚礼や供応などの時の飾り物。洲浜台の上に松・竹・梅などを飾り、鶴・亀を配し、尉・姥を立たせたりしたもの。蓬萊山を模したものという」

とあり、「武家義理物語」の挿絵(図1参照)が掲げられている。ここでは島台ははっきり「飾り物」とされている。また島形は「山水の景を模してつくった置き物。島台。盆景」とあり、やはり何らかの景をつくったものとされている。ところが「すはま(州浜・洲浜)」の項には「①浜辺の入りこんだところ。……」等の説明文があり、②で「①の形状にならった島台の作りもの」と記されている。

また「州浜台」は「州浜に同じ」となっている。「島台＝州浜＝州浜台」でもあり、また「島台＝州浜台＋飾り」で「州浜」は台だけでも飾りつきでも使われる表現とされているようだ。

現代の辞書をさぐることだけではあまり進展がみられないのでこのあたりにおこう。おおむね「島…」の表現は飾りに注目し、「州浜…」の表現は台（の形）に注目したものであるらしいことがとりあえず指摘できる。

## 二 島台の形と場

「武家義理物語」の挿絵に始まり、百科事典や辞書から概略の知識を得たころ、美術全集を眺めていてアツと驚く絵を見つけた。それは「名古屋山三郎物語絵巻」と題された着色の絵巻で、元禄末から享保年間すなわち十七世紀末から十八世紀初期に描かれたと推定されるが、その一場面に島台と思われるものが大きく描かれていたのである。（浮世絵大観『一 大英博物館』講談社インターナショナル、一九八八年）

その場面は男女がくだけた様子で並んで座っている前に、大きな台が置かれている。「州浜台の上に松・竹・梅などを飾り…」という島台の説明にぴったりのものが鮮やかな色彩で描かれている。（図3）台の上に土か苔を敷き、枝振りのよい松を立て、根元に竹・



図 3



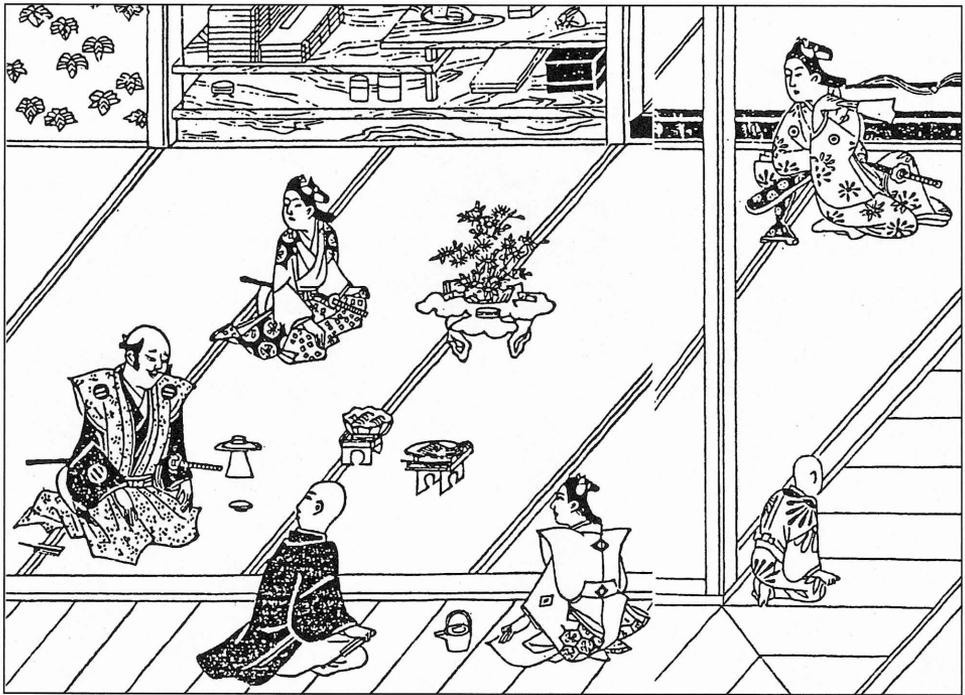


図5

態をよりよく伝えてみるとみるべきだろう。その祝言の座敷の中央に島台が置かれている。婿・嫁・双方の両親などが囲む真ん中の座を占めるのが、立派な松の木に竹・梅、さらに人形等の飾り物を配した島台である。伊勢海老、熨斗鮑のしあわび、盃などがそれぞれ載った三宝が置かれ、床の間には盆石らしいものも見える。祝儀の場面に飾り物がさまざまな小道具として配置されているのがわかる。そしてその中心になるのが島台であるらしい。

元禄期に描かれたという石川流宣筆『大和耕作絵抄』にでる島台は、重陽の節句の飾り物である。(図5)『大和耕作絵抄』は全四巻の絵本で、農耕のみならず当時の年中行事の様子を多く描いている。この場面は、武家の屋敷における重陽の節句の祝いである。島台はやはり座の中心に置かれている。床の間を背にした上座にいるのは主人であろうが、島台が中心になるように人々はそれぞれの身分に応じて縁側や座敷に席を占めている。島台に飾られているのは植物や岩のように見えるがはつきりしない。庭には菊の花が描かれており、島台にも菊が植えられているようだ。婚礼の場のみではなく、こうした年中行事の儀礼でも島台は用いられたらしい。

西川祐信筆「賀庭図」は、享保年間に描かれた着色の掛け軸図であるが島台が詳しく写実的に描かれており、様子がよくわかる。(図6) 松・竹・梅が植えられ、鶴と亀が配されている島台である。床の間を背にした上座に年老いた男女が座っており、長寿の祝い



図6

の席ではないかと想像される。右手に座る壮年らしき男女が、服装や座る位置からして当主夫妻であろう。家長の座を譲り隠退した老夫妻の祝いの席であるから、島台は老夫婦二人の前に置かれている。よく見ると老婦人の前にあるようだから、祝い事の中心はこの老婦人であろうか。それとも、盃を載せた三宝がその右手に見え、座を巡ってゆく盃に合わせ、島台も座を移されるのだろうか。いずれにしても、やはり島台の位置は、全体から見てやはり中心になっているといつてよいだろう。そしてまた島台は、婚礼の場だけではなくこうした賀宴の席にも用いられることがはっきりした。

また、とくに厳肅な儀礼の場とは思えない宴席にも島台が飾られることがあったらしい。十八世紀前半に活躍した画家川又常行「歌舞伎図屏風」に描かれているのは、芝居茶屋の座敷である。扇子を手に踊る者、女と戯れながら盃をめぐらす円座の者などがにぎやかに遊ぶ座敷に島台が置かれている。白木の台の上に松の木などの飾り物が載った豪華な島台が見える。しかし、驚かされるのは、この場に運び込まれようとしている一層巨大な島台である。三人の男が担いでいるから、重量もあるのだろう。台上には若山がそびえ立ち、紅葉の大き木が配されている。これは山水の景をかたどった島台と云うべきだろう。(図7)

こうなると儀礼の装置というだけでなく、これまで見てきた島台のスケールを越えた遊興の道具、山水の作り物になっている。島台

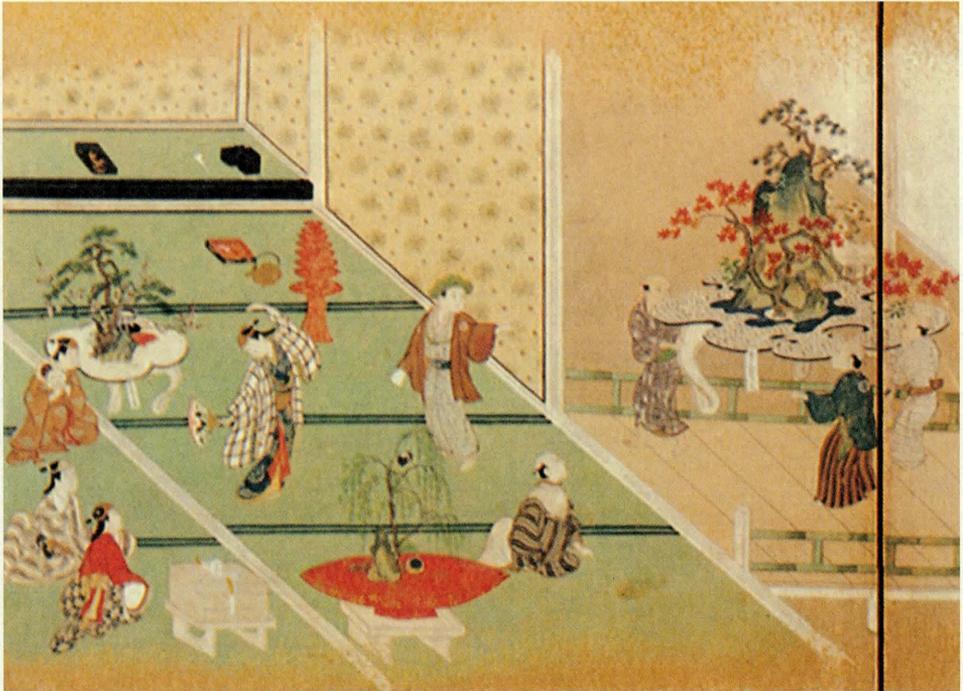


図7

は、形の上でどれほどの多様さを持ち、用途の上でどれほどの広がりを持つていたのだろうか。

さらに、この宴席の場面には手前にこれまた巨大な朱塗りの盃が見え、そこには柳の木が立っている。盃は白木の台の上に置かれており、これをはみ出すほどの大きさだから、実用よりは飾り物なのである。これは島台の仲間だと見てよいのだろうか。島台の世界は意外な深さと広さを備えていたことが想像される。

さらにこのほか浮世絵にも、よく細部を見ると島台らしきものが描かれている場面が見つかるようになった。描かれた島台を探索してゆくと、さらに多様な島台が見つかると思われる。

### 三 島台の象徴世界

島台は、おおむね州浜の形をした白木の平板な台に景物を飾ったものであることが、絵図などを見ることでわかってきた。また江戸時代の婚礼などを扱った儀礼書を見てゆくと、その中には島台を詳しく図解し、用途を説明するものがあることもわかってきた。

たとえば、寛延三年（一七五〇）に刊行された『婚礼罌粟袋』には、島台の図が詳しく描かれ、その用途が書かれている。「高砂島台の図」と題された図には、台の上に岩・砂を配して浜辺の景をかたどり、箒を持つ高砂の尉と熊手を持つ姥の人形を立てて、背後に



図8



図9

は松や竹を植えている。そして「此台は祝宴のかざりなり」とある。(図8)

その次に掲げられている図は「蓬萊押台の図」と題されている。これも浜辺の景をつくったものだが、石組みの上には松と梅が植えられ、鶴と亀が配されている。書き添えられた説明は「此台もかざり物なれど、肴を組み貝類を組むべし」とある。飾りではあるが、純粋な裝飾装置ではなく、酒肴を載せる台の機能を持っている。(図9) 一見すれば同じ島台に見える物も「高砂島台」や「蓬萊押台」な

ど、区別があつてそれぞれ用途が異なるようだ。

さらにもう一つ図が掲げられていて、「押台蓬萊」と記されている。これは歳を重ねた亀の背に石組みを配するもの。松が生え、鶴がとまり、竹、梅のほか、水仙や蜜柑のようにみえる植物が植え込まれている。説明は「押台には肴をかざるべし。その品第一貝類なるべし。或はもみち類、塩引のたい、すはまの様なるをあしらふべし」となっている。(図10)

この儀礼書が刊行された一八世紀半ばの時代には、こうした作法・儀礼の細目が調えられていたのだろう。

また、ここにはこれまで見てきた「島台」ではない、「押台」「蓬萊」という名も現れている。「蓬萊」とは「蓬萊飾り」「蓬萊台」ともいい、道教でいう神仙の棲む蓬萊山を象徴する物であろう。島台が蓬萊山とつながる思想世界の道具と考ええると、その意味や時代がさらに広がってゆく。「蓬萊に聞かばや伊勢の初日より」



図10

芭蕉の「去来抄」の冒頭に掲げられた発句である。これは道教世界でいう想像の中の蓬莱ではなく、日本の新年にかざられる祝いの席の具体的な蓬莱台をまざイメージしている。芭蕉は正月の蓬莱台（島台）を目の前にしてこの句を詠んだのである。

島台は、江戸時代の人々にとって身近な物であったと思われる一方、それが蓬莱と結びついているとすれば、時代はさらにさかのぼってゆくに違いない。儀礼書・作法書などの文献に当たり、さらに絵図類をたどることで島台の世界はさらに大きくふくらんでくるであろう。

註

- (1) 大づかみに言つて、元禄期以前は諸本に挿絵が載る数が少なく、元禄期あたりから挿絵入りの絵入り本が増加しはじめる、と言われている。
- (2) 島台の図が描かれているのは、やはり元禄期以降、十八世紀に入ってから出版物が多い。
- (3) 祝いの席での島台は主役の正面に据えられるものの、その島台を取り巻いて関係者が円形に座を占めるのがほとんどのようだ。見方によっては四方正面、上座下座をあいまいにして、上下の区別を取り払う役割を島台が果たしているように思われる。